

付く共時性現象の体験記録を二〇年から積み重ねてくると、どうも身につまされる思いが多くあり過ぎて、たんにオカルト（神秘的・超自然的）などとばかりで済まされない出来事なのである。言うなれば、我々の生体は正真正銘の霊体（意識体＝魂・心）であり、我が身の中から魂（心）を抜いてしまったら本当にもぬけの殻であり、存在価値さえなくなる事実がある。

今後どのようにして明快な検証ができるかは、体験資料の一つ一つをこの本の中で迫ってゆくことが一番の近道と思うし、そのためにも、記録掲載だけで終わらせてはならないと思っている。

丹頂鶴と高橋園長

潜在心の開放を限りなく一〇〇パーセントに近づける、ストレスを限りなくゼロに近づける、自分を限りなくいのちに近づけるといふ命題は、張り詰めたこの科学文明の世にあつてはなかなかそのチャンスに巡り会えないものである。

個人差には大きいものがあつて、多種多様な機能負担とも環境負担ともいえる負担を心身に感じることは、あらゆる環境の中で誰しも背負っているもので、全くストレスがゼロなんていう方はむしろ変人なのかもしれない。ストレスの許容範囲はその個人差があまりにも大きいようだ。

潜在心の開放、ストレスの開放ということはまた、いのちの中心にかなり近づけることにもなると思っているから、それはすなわち生命力を高めることにもつながる出来事であろう。すなわち、潜在心の開放、ストレスの開放は、生命力の向上となり、奥深い

潜在心（魂心）の活性化を促して、思いも寄らない知恵が湧き上がってくることも決してまやかしてはないと思う。

このいのちは、全世界の存在や、全宇宙の果てのすみずみまでも連なる光ファイバーならぬ生命ファイバーで結ばれている「いのち」であればこそ、限りなく命に近づくとはずなわち、知恵の宝庫を探索するようなものである。

今から二〇年前に体験した車中泊無目的の旅は、潜在心の解放、ストレスの解放、ひいてはいのちの光を強める一助の面からみて、人生の布石ともなる大事な経験であったと思っている。

その後、今日までため続けてきた共時性現象（シンクロニシティ）の記録とその出会いの縁のメカニズムを考える上で、深い世界からの直感力が増してきたように感じてもらえない。

旅は、四一日と三一日の二度にわたる七二日間の旅であり、天に任せ地に任せる自然心で過ごすことになったが、その旅のことを私は、四一日の「鶴の旅」と、三一日の「亀の旅」というネーミングで呼んでいる。

ネーミングは、その旅の象徴性からそのヒントを得たのであり、四一日の「鶴の旅」は、

釧路市で出会った丹頂鶴の自然公園を訪ねたことから得たものであり、また、三一日の「亀の旅」は、行く先々で待っていた亀との出会いから名付けている。

風の吹くまま気の向くままの車中泊と粗食で過ごした日々は尊いものであった。

ではここで、「鶴の旅」四一日のシンボルとなった釧路市丹頂鶴自然公園で出会った園長高橋良治氏との寸暇の会話を振り返ってみたいと思う。

ここを訪ねたのは平成元（一九八九）年五月一九日金曜日のことである。釧路市鶴丘一―二番地にこの自然公園が開園されたのは昭和三三（一九五八）年のことであるが、昭和四五（一九七〇）年には世界で初めての丹波鶴の人工孵化に成功しているという。

乱獲と開発によって絶滅の危機にあった丹頂鶴の保護と増殖の目的で開園されたこの公園には、今（平成二〇年四月二二日現在）一八羽が放し飼いされているという。

「鶴になった男」というタイトルでテレビでもひろく紹介されて多くの人々を魅了した園長さんに逢いたくなくなったのは、国道三八号線を、当てもなく釧路方面に向けてひたすら走っていたときのこと、すでに、夜も深まりライトに浮き上がってきたのが鶴公園の標識案内板である。そこに目が合った時、鶴になった男と会いたい衝動に一気に駆られたのである。

標識をたよりに国道二四〇号線を左折してから約一〇キロメートル位走って、その夜は鶴丘地内の原野の中で翌朝を楽しみに夜を過ごした。

親鶴が巣を放棄して取り残されている鶴の卵を持ち帰り、孵卵器の卵と寝食をともにして、不眠不休にも似た日々の続く中で、人工孵化の鶴の子を見事誕生させた園長。

その後、自然に返すまで鶴の親代わりを務め上げた園長が、飛び立たせるときのその姿は、まるで親鶴以上の愛情であった。

両手をいっぱいひろげてバタバタ羽ばたかせながら飛び立つ特訓の繰り返しは、体力的にも限界を超しているように感じた。鶴の親代わりはどう見てもまさしく鶴になった男その姿にほかならなかったのである。

至難といわれる人工孵化を見事成功させ、自然界に放鳥させるまでの、一貫してにじみ出る愛情はどこから生まれてくるのであろうか。天性といえどそれまでだが、園長と会ったらその熱情の一心について尋ねたいと思いつつ、車中の一夜は夢の如くに朝を迎えたのである。

開園の九時を待つて唐突な面談を申し入れたところ、朝一番で園内の池の補修がある日だからその作業員がやってくるまでならということ、園長室に通されたのである。

何からどう話してよいものか、園長にしてみれば、要領の得ない闖入者が訪ねてきた感じではなかったか。

ひとまず自己紹介を終えてから、テレビで拝見した「鶴になった男」のこと、人工孵化に成功されて自然に返すまでの一念集中の愛情に感動したこと、そして、思いのままの旅を進行中、昨夜国道の看板が目にとまり、とにかくお会いしたい一念でお尋ねしたことを伝えた。

ところがかえってきた園長の話は、微妙に意外なことであった。

「あれ？ あれは少々違いますよ。ちよつとなあ」

「それはまた、どういうことでしょうか」
と尋ねると

「私は、本当は嫌なんです。兄弟にも言われるんだが、もつと鶴を大事にせんといけないではないか…とね」
と言うのである。

私はテレビを拝見していて、あの熱情的な鶴にかける愛情はどうして出てくるのかと、うらやましくもなる思いで観ていたのであった。園長が好きではないのだということに



は少々臍に落ちかねていた。この時、再び園長が話を続けてくれたのである。

「本当は牧場のほうなんですわねー、馬がいいんですわねー。鳥は好きでないので三年に一度くらいの割りで退職願いを出しているのが事実なんですよ」

と言われたから、これは園長の本音なんだろうなあと思いはしたが、私は口を挟むようにして

「そうでしょうか。奥の奥では本当は好きなんですよ」

と勝手な推測を挟むと園長は

「ただ釧路市のこともあるし、国のこともあるし、見に来てくれる方々のことを考えるとそうもいかんでやってるのです」とまで聞かせてくれたのである。

だが園長から発される実直で強い責任感からは、鶴公園を守り通すんだという一念が伝わり胸を打つ。また、馬が好きで馬の牧場に帰りたいたいという思いも、初期の頃は馬への思いが一番の本音であつたらうし、それは決して不思議ではないのだ。馬が好きで鳥は嫌いというのは古い昔の話であつて、風のごとく訪ねた異人には格好の昔話を語る相手であつたと私は思っている。

その後が続く園長の話は鶴への思いやりで一杯であり、やはり鶴からみれば親代わりであることを実感できたのである。

「人工孵化した鶴は自然の中では大変だ：生きてはゆけない。強くないんですよね」

と言う。人工孵化から自然に返してやることは至難のことであるといわれる。

「人工孵化で卵を孵すことはめったにしないですよ。親が水かさが増してきたので放棄した時とか、水にかつたようなものは人工孵化しなきゃ、死んでしまうからね。卵は四時間水につかっていると死んじゃうからね、つまり人工孵化は面白おかしくてやるのではなく、窮余の一策で、みすみす死んじゃう卵を見捨てないで、人の手で孵化してみることです」

と言う。「だからなかなか成功しないのは当然かもし

れないな」と付け加えた。

園長の話からは、鶴への思いが湧き水のごとく次々あふれてくる深い思いが伝わってきた。

牧場の夢、馬への思いは昔の話であって、今は正しく鶴になった男の情熱に燃えていた。結婚には見合いと恋愛があるように、園長と鶴は見合い結婚にも似た愛情の熟成を身につけたのだと私は受け止めたのである。だからこそ手放しで「鳥は嫌いなんです」などと冗談交じりで言えたのである。そろそろ時間と思った頃、園長は「鶴は音に対してバツグンなんですな」と言った。

人工孵化した鶴にとっては、この世の親は鶴ではなく最初に声をかけてくれた園長であり、二〇年過ぎてても親代わりであることに変わりが無いという。音をもって親であるという人工孵化の鶴たちは、園長には絶大なる信頼関係を持っている。気の荒い彼らでも鶴の一声ならぬ園長の一声こそ鶴を超して絶対なのである。鶴の一声も園長にお株を奪われたようなものであり、この丹頂鶴の自然公園は、高橋園長の一声で万事上々に治まるといふものだ。

約束の作業員が来たので話も中断することになったが、今度は柵の中で作業の指示をされている園長に私は柵の外から見入っていた。現場の中にいる一羽の雄鶴が隣の柵に一時預けられることになった。するとそれがもとで一大嫉妬劇が始まったのである。隣の柵には一組の番が入っていたが、その番の旦那が凄い見暮で怒りだして大変な騒ぎとなった。一時預かりの鶴は、突然にして猛攻撃的になったからびっくり仰天だ。縄張り争いというより、やはり雄の嫉妬に違いないのだ。それに気づいた作業現場の若い飼育係が「コラッコラッ、コラッコラッ……」と柵の外から制止はするもののまったく馬耳東風だ。いや、馬耳じゃない鶴耳だったけど、まったく効果もなく無視されていた。攻撃されている一時の宿借り鶴は、すっかり意気消沈して鼻血を流して逃げ惑うばかり。それを知っている園長は仲裁には入らない。

園長いわく

「ケンカの仲裁になんぞ入るもんなら肋骨折られるぞ」

気高くスマートな鶴からは想像もできないが、目の前で見たその威嚇と攻撃力は凄いものだった。

ところが園長は何もかもお見通しである。鶴以上に鶴の心が分かっている感じに思え



たし、鶴との一体心とはこのことであるかと思つた。鶴に対する自信がぐんぐん伝わってくる。鶴のケンカ仲裁には肋骨一本位折られる覚悟でなきやだめだということが分かりだした。

自然体でツルの中に入っていく一時預かりの鶴を元の柵に戻した園長は

「だらしのねえ奴だなあ。あとで治してやるからな」

と、傷ついた鶴に向かつて言つてやると、鶴は不服そうに、親代わりの園長をたじろぎもせずに見つめたまま立っていた。

「ウン…、ハヤクシテクダサイ」

と、鶴の無言のひびきが伝わってくるではないか。また、攻撃していた隣の雄鶴の旦那は「オヤジガ、アイテデハ、ブガワルイヤ」と言わんばかりに、首を威勢よく縦に振つていても一歩尻込みの姿勢になっている。

命懸けのスキンシップで動物と接する姿から、馬も、鶴も、人もその縫いぐるみを脱いで生命一体の世界に身を置き、心を置かないと真の融和は成し得ないと思えてくる。いのち同志の付き合ひ、そこには何ら恐怖感も生まれようのない澄み切つた世界感があると思うし、だから高橋園長の一声は鶴の一声以上の天声になつて聞こえてくるのではな

いか。

訪ねてよかつた。尊いことを高橋園長に学び、鶴にも多くを学ばせてもらった。いつまでも見入つていなかったが、ご迷惑になつてはよくないから一言「園長さんありがとうございます」とあいさつをして鶴公園をあとにした。

鶴千年、亀万年、古来日本人の魂に溶け込んで、健康長寿の手本として、めでたい祝いの象徴となつて、人々の心に幸せを結んでいる「鶴と亀」。

やはり、端正で気品にあふれ、スリムで筋金入りの健康長寿の丹頂鶴。古来、アイヌの人々からはサルルンカムイ（湿原の守り神）と崇められていた。まさしく瑞鳥ずいちようなのである。

世に神秘世界といえどかくタブー視されることが多いもので、敬遠をされ、時には蔑視されることも少なくはない世界のこと、その反面、秘められた関心度といえど驚くほど高いものであって、口には出さずとも大変気になる世界でもある。その、気になる世界のことを、ここで一つの体験を踏まえて開いてみることにする。

生霊いきりょうと死霊しりょうの呼び名を耳にされたことがあるかどうかは伺い知れないところだが、その呼び名があっても、私たちはいちいちその区別をつけることなく生きているのが毎日の生活だと思う。

この世はあの世であり、あの世はこの世であり、今は刻々過去になり、過去はすなわち今となる。そして、今は明日を築き、明日は今を土台に新しい一日となる。それゆえに、どこにこれとはつきりとしたその境を引くことができない大河の流動感がこの身を

打つ。

過去世もこの世も渾然一体の世界であって、生霊（今の心）も死霊（亡き靈魂とこの世の過去心）も区別のしようがない。しかし、一つはつきりしているのは、それは自分の中にある心の集積であり、過去世一切からの心の色合い集団（靈魂⇨潜在意識帯）が自己主張をしている世界ともいえる。そこでは、霊体（靈魂）である自分の姿を知ることができる。

さらに、この霊体の光は、万物万人に通じるいのちに準じた記憶霊光体（原子・元素）であり、スイッチ操作でON・OFF自在でもある世界と考えてみた。霊体から発する記憶霊光体（私の造語）は、思えば通わすいのち綱とも言い換えられる。いわば、思いというものは、一瞬のうちに思いの世界に飛んでゆくという、心が互いに通じ合える世界ではないか。

この思いの世界の操縦、すなわち魂の操縦者は、あくまでも今の自分にほかならない。亡き魂たちは、心の発信力、心の発現力はあるものの、自戒反省心となれば、この世の我々、すなわち肉体者である自分自身をおいてほかに誰もいやしない。生死渾然一体のこの今の自分こそ唯一の靈魂のエージェント（代理人）なのである。車なら操縦ハンド

ルを、また船ならば舵取りをする者こそ心の安全運転義務者といえるものだ。

生は死、死は生、これは誠の話。死は肉体元素が無いだけの話。いわば幽霊に着物を着せているのが自分であるといったらどう受け止めてくれるであろうか。

心は、上澄みの水のごとくに澄んで現れるものならいいのだが、霊体は自在なもので、心のハンドルさばき一つで、人生街道はそれぞれに人間模様を映し出す世界となる。霊魂は、人々の心の先々を照らす道明かりなのだ。

さらに、魂は表現者であるから、今の自分と渾然一体となつて、その表現手段となる文字の世界や、数字の世界や、色彩の世界の波動と一体になつて、意志の表現世界をつくりあげている。その三つの表現世界は、この世の人類に絶対不可欠媒体であるかぎり、魂の意志表現も何らの変わりなく、あの世もこの世も一体となつて、今この世でその魂の意志性を伝えているのである。この世の表現はあの世の表現でもあるわけだ。

霊魂の表現こそこの世一切の表現の源泉であり、人類の今成す全ての分野にわたり、文字的表现、数字的表现、色彩的表现一切合切が、死霊といわれる霊魂の意志によつて、我々が生き続けている真実の姿ではないのか。

我が身はすなわち霊魂であり、生き霊と死霊が渾然一体であつて、そして、生死の総力こそ眼前の世界であり、今ここであり、今ここに生きている世界といえる。

この地球上に見られること、ひいては、宇宙空間までも見ることのできる文字の世界・数字の世界・色彩の世界のひびきこそ、死霊と生き霊の溶け込む合作にほかならない。現代人類の成す表現手段から文字・数・色の波動を消したとしたなら、我々は超原始人にタイムスリップすることになる。

この生身の自分は霊体であり、死霊（靈魂）・生き霊（今の心）の渾然一体の肉体生命であり、魂はピカピカ生き生きとして不滅であり、この世の文字・数・色の表現媒体に溶け込んで活躍されていることを知る。

さて、今回の無目的の旅は、靈魂（死霊Ⅱ潜在心）の浮き出しやすい情況下に置かれていたといえるし、それは生死の境の無い渾然一体の世界ではあるが、私にはその生死判別を感じた唯一の旅であった。

どういふことかといえば、私の受け取り方ではあるが、これが死霊（靈魂）だと感じるのは急な眠気の時がそうだと思つたのである。またわけもなく急な疲労感を感じるときなどは、発信元は別にして、それは生き霊だと思つたことである。急なる不自然な眠気と疲労感それも、その原因が見当たらずに「急」なる発現が感じられたのであり、



それは私なりの判別でもあった。はたしてそれが普遍性があるかどうか、妥当性があるかどうか、きわめて独善的な私の思いである。

そこで、靈魂からの発信と思われる旅の一例をここに紹介してみたいと思う。時は四一日間の鶴の旅の後半にかけてである。平成元（一九八九）年五月二日（日曜日）、オホーツク海沿岸を一直線に走る国道二三八号線でのことであった。ちょうど三時過ぎであったが、すさまじいほどの眠気が目の前をかすめて全身ふわふわ宙に浮き出した。車ごと浮く感じの走行となり、ハッと気を取り戻した時にはいいあんばいに駐車帯の標識が見えたから吸い込まれるままに前後不覚の熟睡となつて、目を覚ましたのは四時半近かった。ゆうに一時間は寝込んでいたことになる。

まだ陽も高かった。あの渦に呑み込まれるような睡魔は、旅の中でもそうめつたにあるものではない。気も晴れて出発したのは四時一八分のこと、前方にはトンネルが見えていて、ここは、神威岬カムイの近くであった。

まもなくトンネルを通り抜けると、右視界にはとめどなく続くオホーツク海沿岸の大海原が開けている。距離にして四、五キロも走つたときのこと、左前方の路肩を行く一匹の動物を発見した。どんどん近づくと、それは紛れもなくキタキツネであることがわ

かったが、追い抜く数十メートル先で彼は急に道を横切つて海側の草むらの中に入り姿が見えなくなった。気にせず走ろうとしたが、野性のキツネとなれば好奇心が湧いてくる。スピードを落としながらバックミラーを気にしていた時のこと、彼は再び路肩に姿を現して歩いていたので。これはない、右折して農道の入り口に横付けをして見守っている、彼は臆することもなくどんどん近づいてきて、ついに四、五メートルまでになつたが逃げ出す気配は全く感じられないのだ。

至近で見た彼は決して若くはないが、さすがは野性のキタキツネである。尻尾が太く長く立派な風格だ。顔には無駄もなく、両耳を峻と立てて、目は鋭く深く、いかにも野性を生き抜く知性を感じさせる。さらに一種の余裕さえ感じられたのである。顔は逆三角形で、口と鼻先がそいだよ



げて考え込んでいたが、ほどなくしてくわえてみて、これはいけそうだと食い始めた。それほど腹を減らしてはいないようだし、警戒感もほどぼり冷めて旧知の友のようになったポンタ君。だが、それは野性の機敏さで、直前での写真撮りには敏感に反応する。カメラは好きではないようだ。どれほど過ぎたであろうか、時の経つのも忘れて対面していたが、ポンタの方から帰り姿となって、無言の空間で私のすぐ右側をなぞるようにして通りかかったその時である。

「アンタモ、カエルガヨイ。ハヨウイキナハレ…」

と、どこからともなく思念が渦を巻く。このとき時計は四時四四分を指していた。そのまま国道に出たポンタ君は、無言でこちらを振り向いてから再び国道を横切って向かいの路肩からこちらをじいっと見ているのだ。

うな姿なのだ。

前夜鶴公園の近くの店で七〇円で買ったカステラを堅くて食えずに残していたのを思い出して、それを窓から静かに放つてみた。人間がエサをくれることを彼らは学習しているのかと思つて、悪いことをしたかなと反省をする。ここで写真に撮ろうと思ひカメラを向けた一瞬、キタキツネがそのカステラをくわえて原野に身をひるがえしたから、車から四、五メートル移動して彼の近くに再び接近したのである。今度は逃げようとはしない。車から降りて手が届きそうな二メートルくらいまで近づいたが彼の警戒感は消えていた。おかしいと思うほど一気に仲良し気分になり、土手に私が肩肘ついて寝そべると何と彼も同じような姿になって、両手を前にして腹ばいとなつてじいっとこちらを見据えているのだ。

堅いカステラも、少しは食つたようだが一気に食わずにそこに腹ばいのままのキタキツネ。この時ふと思いついて、ポンタ君という名前を付けた。

「おい、ポンタ食べな。もつとあるぞ。昆布センベイもあるぞ」

と私は、前々日に大間港の店で買った昆布センベイを思い出した。「そら、うまいぞ」と言つてセンベイを放つたら、「コリヤーナンダ」とばかり、ポンタは左右に小首を傾



私は遅れて国道を右折してポンタ君のいる車線に出てから手を振りつつそのまま北上を始めた。バックミラーにはポンタ君の姿が残っている。直線道の中で、いつまでも動かず見続けるポンタ君の姿を見届けていたが、やがてその姿はミラーの中から消えていった。

その後すぐに現れた二一〇キロの標識。国道二三八号線は、起点の網走からここまで二一〇キロメートル地点ということである。さらに浜頓別町二二キロの標識が現れ、次に宗谷岬二二キロの標識が現れた。いよいよ最北端に到達したのであり、海の向こうには、ロシア領土のサハリンが霞の中にある。

家を出て車中泊も三一日を迎えたが、その夜は、日本最北端の民宿柏屋で、くの字の車中から開放されて初の布団で休むことにした。

ところが、部屋のストーブをみてハツとした。ストーブにはナンバー二〇一と記されているのだ。この部屋は二〇一号室ということである。あれつと、思念は次々と立て板に流れ出した。母と妻と私が、数珠となつて勢揃いを始めていたことに気づいた。

旅の出発日が四月二一日

今日は五月二一日

ポンタ君との別れが四時四四分(和数Ⅱ一ニⅡ二一)

ポンタ君の姿が消えた時二一〇キロの標識

部屋とストーブのナンバーが二〇一号

これらの数霊のひびきは、母の命数Ⅱ命日の二二日に共振・共鳴する。そしてこの国道は二三八号線で、妻は富美子で八日生まれの数霊を持つ。それを数霊に置き換えてみれば、フミコⅡ二三コ・八日生まれであるから、二三八号線を走ることにはそれなりのひびきの向き合わせがあったといつても、決してそれほど横車ではないと思う。また、立て続けに現れた浜頓別へ二二キロメートル、宗谷岬へ二二キロメートルという標識との出会い、さらに、宗谷岬到着が六時二二分なのである。私の命数の二二日生まれと共振するではないか。さらにあの止み難き眠気は神威岬カムイシという神の力、神の威力の場所と同期する。これはただならぬことである。それは、キタキツ



皿となるから、一二の表裏一二に置き換えるならこれまた、ここにまでも魂の働きがあるのかと真に迫ってくる。

旅をしても、妻や、母や、祖先や、多くの縁者たちの思いによって守られている実在感にひたることができる。それは、元の元を辿ればいのちの光（天の気と地の気Ⅱ食）にたどり着く共振共鳴共時の現象世界ということになるであろう。

厳然として実在する魂の意志性がここにある。その表現手段は、文字的・数的・色彩的に溶け込んで、その光の波動がオーラとなって守り続けているのである。見えざる時計の中にこそ、その真実の姿が、その真のいのちの働きがあるごとくに…。



であり、靈魂の世界であると思っている。言わんや、この身この命は、靈体、靈光の身にほかならないではないか。

さて、車のくの身から開放されて、布団の中で真一文字で休ませてもらう喜びが湧いてきて、人の真心が沁みってくる。夕食は久々の手料理。ところが、何と私はついに皿の数まで数えているではないか。ごちそうの皿が一〇皿、ご飯と汁が二皿、合わせて一二

ネのポンタ君との出会いに向けた、あるご意志の時間調整と思えてならない。数分・数秒の誤差で、その出会いはなかったことを考えるならば、出会いの運びはただごとならぬ「あるご意志」であればこそなのだ、私には心底ひびいてくる。

時間も空間もない靈魂の世界では、昨日のことも、古い億万年前のことも、一面一体の今この世界なのであって、時空を越えて今ここにあるのが心の世界